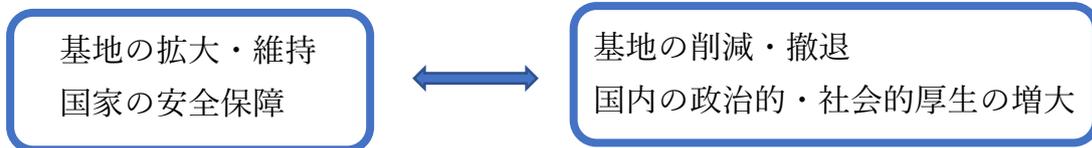


従来の議論

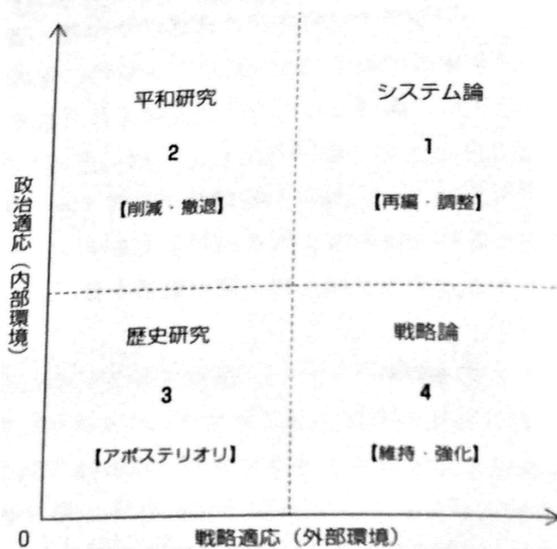


両者を満たすような政策は十分に検討されてこなかった



戦後の在日米軍基地をめぐる論争

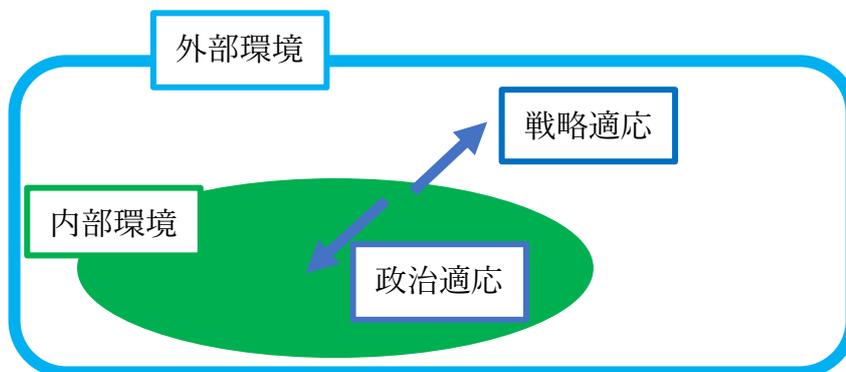
図2-1 基地の位相角



出所：筆者作成。

アクターの選好は[戦略適応]と[政治適応]をそれぞれの程度重要視するかに依存している。

外部環境(国際的な戦略環境)と内部環境(政治的・社会的環境)への適応の期待値をそれぞれ軸にとる。



第2領域 平和研究

分析の中心は国内の政治環境である。人間の安全保障の領域。事件や事故、暴力、人権侵害等の問題や基地があることでかえって緊張を高める(負のフィードバック)などの理由から政策目標は基地の削減、移設、撤退へと向かう傾向にある。

- ・ 自衛隊と米軍の基地共同使用に関わる地位協定の問題
- ・ 基地経済の問題

第4領域 戦略論

分析の焦点は安全保障環境(外部環境)への適応にある。この領域のアクターは国家の合理性や、意図と結果の線形性を仮定して、機能主義的なアプローチを用いる。つまり、米軍基地の設置/維持は戦略的利益が得られるという期待から決定される。沖縄に米軍基地があることは地理、地勢的条件などから評価される。

第3領域 歴史研究

この領域は[歴史]あるいは抽象的に「外適応」の問題を扱う領域である。つまり、他の領域との大きな違いは所与の環境に対する[最適解]を自由に実現できるとは考えない事である。実際に沖縄の基地に関しても、米国の基地計画が必ずしも合理的かつ設計的だった訳ではなかったことがわかっている。

基地政治における[外適応]とはある目的のもとに行われた政策が生み出した基地が後付的に異なる環境適応的な機能を獲得するプロセスを指す。

(外適応の例・・収容所、軍事施設 → 団地、工場、ショッピングモール)

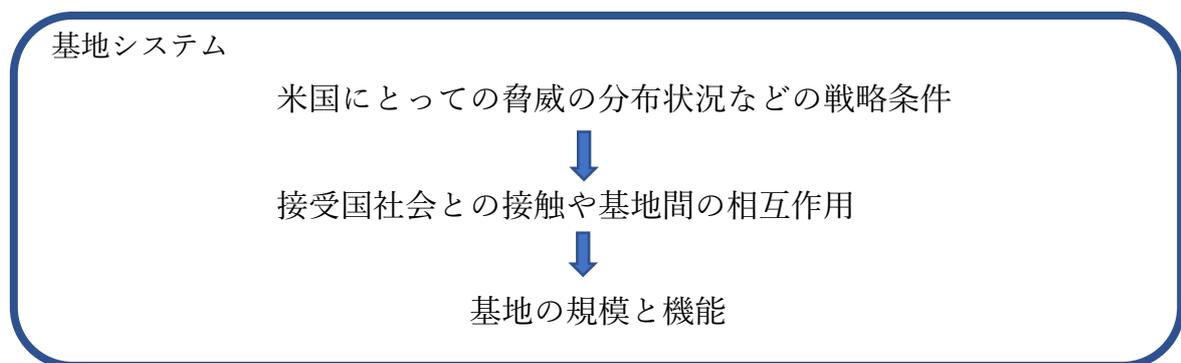
この領域から将来の基地構造に関しては確実なことは何もいうことができない。したがって、提示される政策は分散が大きく、政策の首尾一貫性が担保されない場合がある。この領域のアクターは「基地の徹底」を主張する者がいたり、「基地の維持・推進」を主張するものがいたりと主張が多様であることが考えら

れる。このことはグラフで第3領域の位相角が90度であることに対応する。

第1領域 システム論

この領域のアクターは基地のネットワークをシステムと捉えたうえで、内部環境と外部環境への適応を調整しようとする。そこから導かれる政策目標は主に基地ネットワークの再編である。

システム・・・相互作用するエージェントが1つ以上あり、全てのエージェントが戦略をもち、それを達成する適正な手段と環境要因が揃っていること。



「基地政治の創発性」

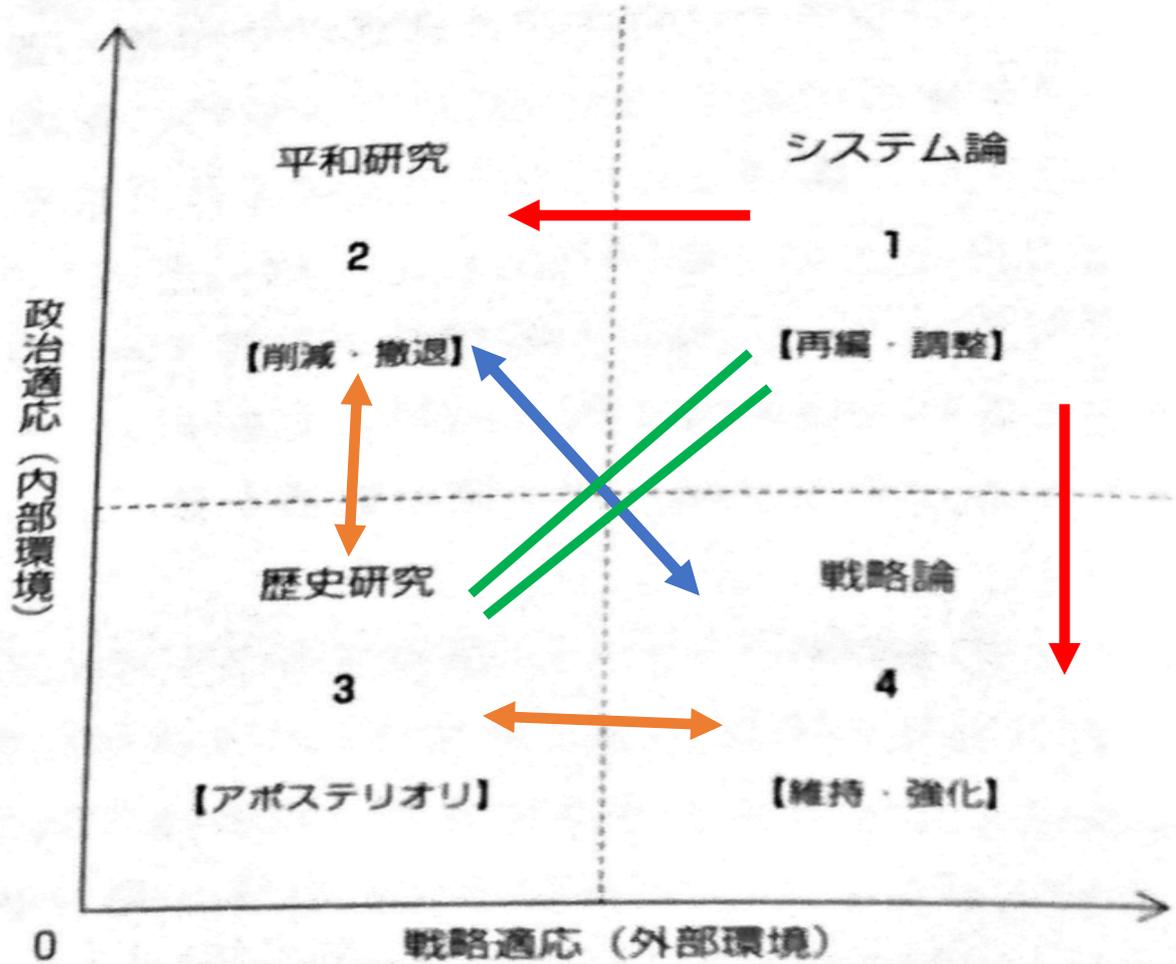
基地政治の将来を形成する力がシステムのエージェントの相互作用を通じて出力されるならば、小さい事象であっても、相乗的に影響が現れるときには結果は予測しづらい。(事故を発端とした板付米軍基地の撤去運動など)

このように第一領域のアクターは基地のネットワークをシステムと捉えるので、戦略適応とは異なる、予期していなかった効果を後に示す可能性を棄却できない。この考え方は第3領域と類似している。

さらに第一領域のアクターは基地の重要性の評価を固有の機能から評価することもなく、(第4領域)基地の政治的分脈から評価するのでもない。(第2領域)システムの残りの基地の代替能力をもとに基地の重要性が評価される。

各領域の関係をまとめると、

図 2-1 基地の位相角



出所：筆者作成。

←→ (VS) 基地は人間の安全保障の脅威である/基地は国家の安全を保証する手段

←→ (VS) 基地政策は設計可能/基地政策は設計可能ではない(外適応)

⇔ 予期していなかったことが後に起こることを共有。

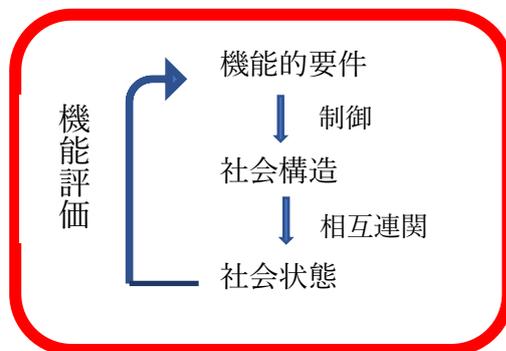
→ 特定の分脈からのみ基地の評価を行なっている。

これまでは要約に重点をおいていたが、これからは疑問に思ったことを中心にする。

・機能主義的なアプローチについて

第3領域(歴史研究)から第4領域(戦略論)への批判との重なるのだが、機能だけから政策を決定できるのか疑問に思った。最初意思決定の段階で等価な機能を果たす別の構造(政策)が原理的に存在してしまうのではないか。(例、三島)このような疑問を出発点にして議論していきたい。

機能主義的なアプローチに根本的な問題があるのではないかと思う。以下、パーソンズの構造—機能理論になされた批判などを参考にしていく。機能主義的なアプローチを簡単に図式化すると次のようになっている。



第1領域(システム論)では基地が満たさなくてはならない要件は複数ある考えている。

しかし、機能的要件が異なるれば、社会状態の評価は異なるだろう。ではどのように複数の機能的要件を集計するのだろうか。各機能的要件の要請を適切に反映したと言いつ張れるような「集計」はアローが「民主主義の不可能性」を証明したように不可能ではないか？

(パーソンズは機能的要件として、「適応」「目標達成」「統合」「潜在的構造維持と緊張緩和」をあげていて、これら4つの機能の要請を適切に民主主義的に反映した集計はアローの「民主主義の不可能性」の証明を応用して不可能とされた。(志田基与師))

しかし、機能的要件が1つであったり、機能的要件に選好(順序)がある場合は上記の批判は当たらない。ところで、社会変動とは社会構造が変化することであり、社会構造の変化は機能的要件の変化によってのみ引き起こされる。

したがって、社会のダイナミクを説明するために、機能主義的アプローチは機能的要件の変化自体も説明するものでなくてはならない。つまり、自己組織システムの作動を説

明できる理論ではなくてはならないということである。自己組織システムとは自己の状態を決定する情報自体を決定する性能を持ったシステムである。つまり、基地に関する意志決定するアクターは機能的要件を決定するための情報を選択する自己組織システムであると言える。そして、ここで情報に値するのも機能的要件である。言い換えると、特定の評価関数によって社会状態を選択していることされ自体が評価関数によって機能的に評価され、選択されなければならないのではないか？(そうでなければ、別の原理を持ち込まなければならない)

証明は後のページで記した。その結果として機能主義を徹底することは原理的に不可能であることが証明されている。システムの自己組織的な挙動は機能主義的に説明することはできない。システムが機能的要件を持っているように見えるのは、機能主義的な説明の射程の外にある。そもそも、自己組織性まで議論を徹底させるべきなのかは議論したい。なぜなら、そもそも政治学/歴史学の事象の説明の方向性として必要条件/充分条件という違いがあるのかもしれない。つまり、政治学は歴史学に比べてより普遍的で構造的な要因から因果関係を説明しようとするものなので、説明は必要条件的になってしまうのかもしれない。歴史学と政治学の対比は後にまた示す。

・顕在機能/潜在機能に関して

顕在機能とはシステムに内在する視点に対して、現れているものであり、潜在機能とは逆に明示的に現れていないものである。(具体例・・・プロ倫、革命)つまり、潜在機能とはシステムに内在する視点に意識されることなく、顕在機能を指向することによってのみ遂行されるものである。

第1領域のアクター(システム)と第3領域(歴史研究)のアクターは時間の経過とともに最初の機能的要件とは異なった効果を基地が示していくことで認識を共有していた。しかし、顕在機能/潜在機能を導入すると状況は異なるのではないか。つまり、基地の意志決定に関わる少数のアクターのみが他のアクターとは異なり潜在機能まで考慮に入れることができれば、もっと設計主義的な要素を増やすことができるのではないだろうか。(要するにもっと頭がいいアクターなら基地政策の設計可能性をあげられるのではないか？無限後退することは明らかであるが。)

・カオスかランダムなのか

「カオス」とは初期条件に対して著しい感応性を示す時間発展のことである。簡単にいうと、ほんのわずかな初期条件の違いが極めて大きな差異として結果することである。

つまり、「カオス」は事実上完全な予期は不可能であるが、原理的には決定論的である。物理学では本来なら「規則(運動法則)」と「状態(具体的な値)」は区別される。古典物理学では値を方程式に代入すれば、規則によって状態がどのように変化して行くのか予見できる。しかし、「カオス」では状態が出現してしまった後にその状態を出力する適当な軌道が選ばれる(わかる)。

一方、「ランダム」は量子力学的な描像であり、時間発展が確立的にしか記述できない非決定論的であることを表す。

第1領域と第3領域のアクターが共有している予期していなかったことが起きるといふ認識の根本には「カオス」なのか「ランダム」なのか疑問に思いました。そして、「カオス」か「ランダム」の違いが歴史学のやっていることに大きく関係していると思う。

歴史学者に対して

国際関係研究のアプローチ(コリン・エルマン、東京大学出版)を参考に政治学/歴史学の違いを列挙する。

政治学

- ・理論を用いて社会問題を解決、政策の提案
- ・全ては比較可能な例として一般化を試みる
- ・独立変数は少なく、簡潔な説明を好む
- ・多くの類似した事例を説明できる必要条件に関心を持つ
- ・比較研究
- ・因果関係は単純に捉える一方、アクターの意図と行為の間にズレがあると認識。意図とは切り離された「行動」に注目。(なので、構造的要因に注目)

歴史学

- ・特定の過去それ自体に関心
- ・一般化は時間や場所に制約される
- ・過剰要因に寛容(歴史は偶発的であり、単一の原因では説明できない。)
- ・1つの事例の過程全体を詳細に説明することに関心を持つ。(十分条件的)
- ・過程追跡(叙述)
- ・因果関係を複雑に捉える一方、アクターの意図や目的を解明することで十分とする傾向。(還元主義)



上記のようにまとめたように歴史学は因果関係を複雑に捉えているのに、事象の因果関係をアクターの意図に還元してしまうことに違和感を感じた。つまり、歴史研究は何をやっているのか議論をすることで理解を進めたい。

自分が疑問に思ったことをまとまっていないが、何個か列挙した。そもそもこの安全保障の位相角第二章をゼミでやるとした意図とは大きくずれてしまったかもしれません。なので、各々疑問点を持っている人は発言してください。よろしくをお願いします。

引用文献

- [1]ルーマン社会システム理論 ゲオルク・クニール 新泉社
- [2]社会システムの生成 大澤真幸 弘文社
- [3]国際関係研究のアプローチ コリン・エルマン 東京大学出版

尚、次の数学による証明は[2]から引用しています。

構造一機能理論の数学的な批判

担当 長井弘平

2020.7.8

1 証明

理論の対象となるのは、現実的・可能的な社会状態である。社会システムを構成する要素の値を、変数 x_i の値で表現すると、社会状態は x は n 個の変数の値によって

$$x = (x_1, x_2, \dots, x_n) \quad (1)$$

と表すことができる。どのような変数 x_i を用いるかは理論上の必要に応じて様々である。わかりやすい単純な解釈は変数 x_i は、参与している行為者の i の行為選択とみなすことです。この場合は、社会状態は、参与している行為者 n 人の行為者の行為選択の組によって表現される。

社会状態を構成する各変数の変域を、それぞれ X_1, X_2, \dots, X_n とする。この時、 X_i は行為者 i にとって可能な選択肢の範囲を示す。およそ論理的にありうる社会状態はこれらの変数の直積空間 X として得ることができる。

$$x \in X = \prod_{i=1}^n X_i \quad (2)$$

この直積空間のことを社会状態空間と呼ぶ。

構造一機能理論がまさに機能主義的であるのは社会状態を評価するシステムを有しており、しかもこの延長線上で、社会システムを自己組織システムとして理解されているからである。これを概念化すると「特定の評価関数によって社会状態を選択していること」それ自身が機能的に評価され、選択されていると見なさなくてはならない。機能的であり、かつ自己組織的な社会システムは、次のような性質を持った、社会状態空間の直積 $X \times X$ から評価空間 Y への評価関数 g を持っていないなければならない。

任意の評価関数 $f: X \rightarrow Y$ に対して、ある $a \in X$ を持っていたとき、 $g(x, a) = f(x)$ とすることができる。ただし、 $x \in X$ である。評価関数 f はある機能的要件の存在と対応している。もし、自己組織化を機能主義的に理解しようとするれば、評価関数 f を指定するようなメタ評価関数を見出さなければならない。関数 g はそのメタ関数であり、[任意の評価関数 f に関して、それが社会状態 x を選択している/選択していない]を選択している。注意すべきは評価関数 f 自身がシステムの内的 a な状態に「翻訳」されている。さもなければ、 f が g が表現する評価の対象となり得ない。

しかし、以上のような万能な評価関数 g が、システムに対して存在していると仮定するとここから論理的な矛盾が導かれてしまう。背理法を用いて証明を行う。もし、関数 g が存在しているとき、任意の関数 $u: Y \rightarrow Y$ に対して、不動点 x_0 が存在することを証明する。

$$u(x_0) = x_0 \quad (x \in Y) \quad (3)$$

システムの内部状態を表現する要素 $x(x \in X)$ は全体として可算個なので、それぞれの x に一個の自然数を割り当てることができる、その値を $g(x, a)$ に代入したものを次のように並べる。

$$\begin{pmatrix} g(0,0) & g(1,0) & \cdots & g(k,0) & \cdots \\ g(0,1) & g(1,1) & \cdots & g(k,1) & \cdots \\ g(0,2) & g(1,2) & \cdots & g(k,2) & \cdots \\ \vdots & \cdots & & \vdots & \\ g(0,k) & g(1,k) & \cdots & g(k,k) & \cdots \end{pmatrix} \quad (4)$$

以上から対角線要素を取り出す。 \leftarrow 「カントールの対角線論法」

$g(0,0) \ g(1,1) \ \cdots \ g(k,k) \ \cdots$

いま任意の関数 $u: Y \rightarrow Y$ で与えられたとして、 $u(g(k,k))$ ($k = 0, 1, 2, \dots$) はある評価関数 f によって

$$u(g(k,k)) = f(k) \quad (k = 0, 1, 2, \dots) \quad (5)$$

と表される。ところで、

$$f(x) = g(x, a) \quad (6)$$

だから、

$$u(g(k,k)) = g(k, a) \quad (7)$$

$k = a$ とすれば、

$$u(g(a,a)) = g(a, a) \quad (8)$$

$x_0 = g(a, a)$ とおけば、これが関数 u の不動点である。 \checkmark

従って、メタ関数 g が存在する時は、評価空間 Y から X への任意の関数 u に不動点が存在しなければならないが、不動点を持たない関数 u を簡単に作ることができる。 u を 2 値的にできるとする。 ($Y = 0, 1$)

$$u(0) = 1, \quad u(1) = 0 \quad (9)$$

のような関数 u は不動点を持たない。従って、評価関数自体を評価するメタ関数 g は存在しない。つまり、社会システムの自己組織的な挙動を、機能的に証明することはできない。社会システムが機能的要件を持っているように見えるのは機能主義的な説明の射程の外にある。